2013年8月24日（土）
立命館大学文学部考古学・文化遺産専攻

五塚原古墳第４次発掘調査
現地説明会資料

（1）ごあいさつ

五塚原古墳は、京都府向日市寺戸に所在する全長約90mの大型前方後円墳です。墳形などから最古級の前方後円墳であると推測され、古墳出現のプロセスを解き明かす鍵を握る古墳として、多くの研究者が重要視する古墳です。また、向日丘陵には元稲荷古墳・寺戸大塚古墳・妙見山古墳といった100m前後の大型古墳が累代的に造営されており、3～4世紀代の地域首長の姿を明らかにする絶好の資料です。

立命館大学文学部考古学・文化遺産専攻は、8月1日から同30日(予定)にかけて、本墳の第4次発掘調査を実施しております。今回の調査では、本墳の（1）後円部の円弧の描き方、（2）後円部径、（3）墳丘周辺遺構、（4）墳丘部位ごとの盛土法や葺石施行法の相違の有無、（5）埴輪や土器など古墳構築時期の手がかりになる遺物、などの解明を主目的に据えています。

本大学と併行して調査を実施している向日市埋蔵文化財センター、ならびに向日市教育委員会から多大なご支援を賜っていることに厚く御礼申し上げます。（下垣）

（2）五塚原古墳と向日丘陵

五塚原古墳は京都盆地の西部を流れる桂川右岸の中央に広がる向日丘陵の一角に位置し、東側の眺望が開け、京都盆地を一望できる位置に造られています。

向日丘陵一帯には古墳時代を通して数多くの古墳が築かれ、向日丘陵古墳群と呼ばれる一群を形成しています。なかでも五塚原古墳と元稲荷古墳は、前方後円墳と前方後方墳という墳形の違いはありますが、細いくびれ部から前方部が大きく開いており、前期古墳の中でも古い様相を示します。ただし、五塚原古墳からは築造時期の分かるような遺物が出土していません。五塚原古墳が元稲荷古墳に先行するという現在の見解を裏付ける遺物の出土が期待されます。（藤原）

図１　五塚原古墳の位置

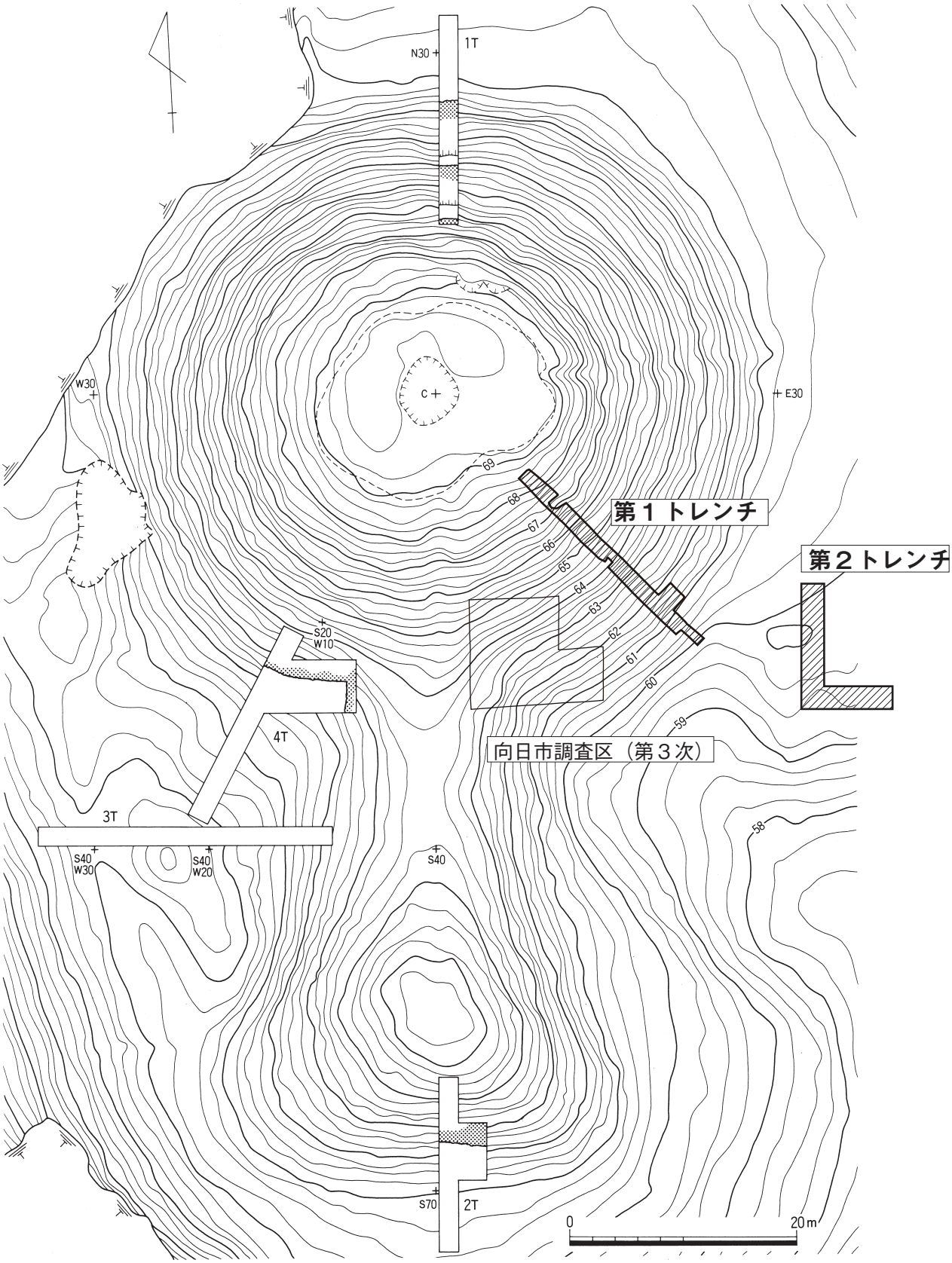

図２　墳丘測量図とトレンチ配置図（1/500）

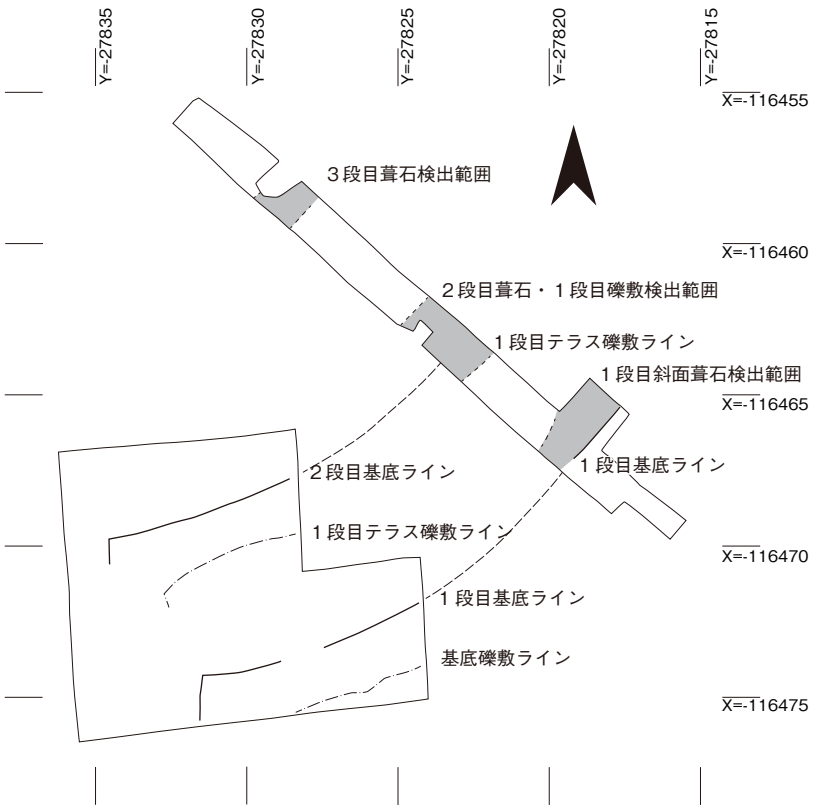

図３　第１トレンチと向日市トレンチの関係（1/250）

（３）調査の概要

第１トレンチ　後円部の円の周り方を探る目的で、主軸から時計回りに 135 度の位置に設定しました。後円部中心点から約 27.5m の位置で１段目の基底石（根石）列を検出しました。各段は約 2.3m ～ 2.4m の高さに築かれています。２・３段目については、明確な基底石を検出できていません。基底石は、隅丸三角形の大型の石材が据えられています。斜面の葺石は 10cm ほどの石材を小口積みに葺きつつ急角度で 40cm ほど上がり、その上は緩やかな傾斜になります。２段目の平坦面には 10cm 未満の小さな石による礫敷があります。１・３段目の礫敷の有無に関しては現在検討中です。木によって良好に遺存しない箇所もあります。（原田・向井・角・辻村）

第２トレンチ　くびれ部の東側に方形の高まりがあります。この高まりの性格を確認し、また古墳との関係を探る目的で、L 字状のトレンチを設定しました。

調査の結果、トレンチの南西部分には、鎌倉時代ないしはそれ以前に溯る大きな落ち込みがあったことが確認できました。この落ち込みは、地山を削って形成されており、一定程度後に埋まったと考えられますが、人為的なものか自然堆積なのかは現在検討中です。

落ち込みが埋まった後には、落ち込み内の西寄り（トレンチの南西）に長径１m 程度の土坑が掘られています。土坑が掘られたのは鎌倉時代頃と考えられます。（菅・藤原）

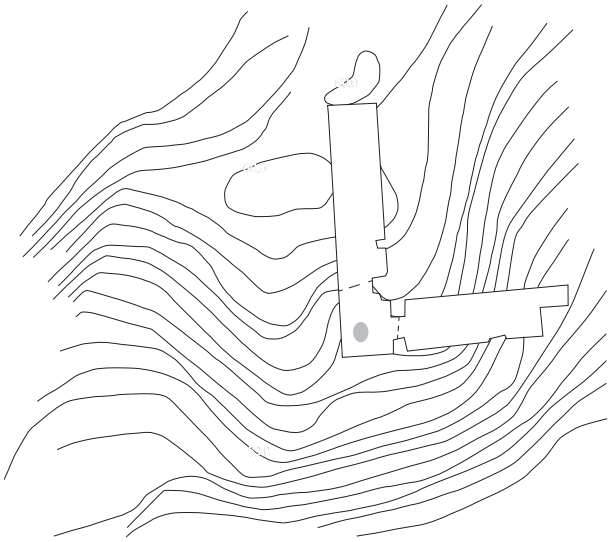

図４　第２トレンチ（1/300）

出土遺物　今回の調査では、古墳の築造と関係する遺物は出土していません。第１トレンチでは１段目基底より外側の転落石上面から、軒丸瓦・平瓦が出土しています。第２トレンチでは表土から瓦が、掘り込み内の堆積土層から瓦器やかわらけが出土しています。

今回出土した瓦は、軒丸瓦の文様と、桶巻き作りという製作技術をつかった平瓦から、７世紀後半と考えられます。五塚原古墳の北東には宝菩提院廃寺という白鳳期に創建がさかのぼる寺院があります。今回出土した遺物も、宝菩提院廃寺と関係があるものと考えられます。（田村）

（４）調査のまとめ

第４次調査では、（１）後円部の円弧の状況、（２）後円部の葺石と礫敷の構築技術、（３）東側の方形の高まりが古墳と関係ない遺構であること、が明らかになりました。特に、後円部が正円を描かないという様相は、播磨や讃岐などで古墳時代前期に築造される前方後円墳と類似し、それらの地域と五塚原古墳とが関係を有していた可能性が高まりました。五塚原古墳の南に存在する元稲荷古墳で、讃岐地域に由来する土器が出土していることも示唆的です。葺石と礫敷の構築は、以前（2001・2002 年度）の立命館大学の調査と今回の調査とで差異はなく、一貫した施工管理がなされていた可能性があります。また、くびれ部の東にある方形の高まりが古墳とは関係なく、中世以降の地形改変によるものと判明したことも、地域の歴史を明らかにする上では重要な成果です。

今後は、上記の成果をより吟味・検討していきたいと考えています。（原田）

五塚原古墳第４次発掘調査　現地説明会資料

発　行　日　2013 年 8 月 24 日

編集・発行　立命館大学文学部考古学・文化遺産専攻

〒 603-8577　京都府京都市北区等持院北町 56-1

Tel/FAX　075-466-3493　　E-mail　rits_arc06@yahoo.co.jp

調査担当　和田晴吾（特任教授）・下垣仁志（准教授）

執　　筆　原田昌浩・菅博絵（大学院生）、向井賢・角早季子・田村陽・辻村公亮・藤原怜史（学部生）

※本資料の内容は、現時点での知見であり、今後の検討で変更する可能性があります。図のご使用はご遠慮願います。